

てしまったが、これについても近々公表することができるものと思う。

2. 2年目を迎えた「外国人日本語能力試験」に引き続き調査員として参加している。1年目の結果は、大坪一夫(筑波大学)野口裕之(東京学芸大学)両氏とともに、昭和59年度日本語能力試験 分析評価に関する報告書 外国人日本語能力試験企画小委員会にまとめたが、この報告書は、〈部外秘〉の扱いになっているので、少なくとも数年間はお目にとまることはなさそうである。

それにしても、日本語版 TOEFL への道が、最初考えていたより遥かに遠いものであることを実感している。これは、この仕事にかかわる個々人の意識の問題と言うより、テストの果たす社会・文化的機能の彼我の差の反映であり、我々の世代のうちに、TOEFLに追いつくことは不可能であろう。ETSは独自に日本語テストを開発し始めた模様で、それにも比肩するものになるかどうか疑問である。ただし、このような比較は、あくまでもETS流の価値観を前提としての話であり、わが国でその方向を目指すことが適当かどうかは、十分議論の余地がある。

全くの独断の見解であるが、アメリカのような多民族国家では、いやでもそこに1次元の能力の物差しを設定し、その精度を高めていかざるを得ない必然性があったのに対し、わが国ではそのような方向は従来社会的要請としては存在しなかったのではあるまいか。入学試験をめぐる議論にしても、それが主として受験生の負担の面

から論じられ、試験の得点そのもののメカニズム(テスト理論の用語で言えば、信頼性と妥当性)について論じられることはほとんどない。その意味では外国人のための日本語テストは、その種の問題を本気で論ぜざるを得ない最初の機会なのではないかと思われる。(試行試験のときから既に若干の「国際問題」は発生していた。)

しかしながら、一方において日本の国情、あるいは日本人の能力観といったものが、日本人によるテストには反映せざるを得ないし、また、それはそれでよい。いわば、わが国の心理測定における最初の異文化接触の機会なのであろう。少々無責任な言い方だが、今後が楽しみである。

日本語能力の測定の問題に関しては、日本語教育学会の「認定委員会」のメンバーとして、月に約1回の会合に出席し、いわばもう少し地道な努力をしている。この方の成果は、2年後には「日本語テスト入門」といったタイトルの書物として世に出ることになる。

3. いつになく多くの紙幅を費やしてしまったので、これ以外の仕事について述べるのは差し控えたい。ただ、最近ようやく自分が教室内外で研究者として果たしていくべき役割が明確に自覚できるようになったように思われる、ということだけは記しておきたい。これはまた、研究というものが、真空中で行われているのではなく、個人のおかれた文脈との相互作用の産物である、ということの自覚でもある。質の高い文脈をあたえ続けてくれている教育心理学教室に深く感謝している今日この頃である。

研究経過報告

河合優年

1985年から1986年にかけての経過について述べる。文部省の若手在外研究員として1985年4月より1986年2月まで米国で研究に従事する機会を与えられた。まったく新しい環境に当初は戸惑う事も多かったが、多くの友人と学生の助けにより、考えていた目的以上の事が出来たことは幸いであった。

主な滞在先は、Purdue University (West Lafayette, Indiana)であった。ここでは、乳幼児の行動をどのようにとらえ分析するか、そしてそれら研究をリードする理論をいかに展開するかを同大学の発達研究グルー

プ (PIG: Purdue Infant Research Group) の仲間と検討した。これらの結果の一部は ICIS (International Conference on Infant Studies; 1986, Los Angeles) において発表された。また、その理論的部分については1987年に東京で開催される ISSBD (International Society for the Study of Behavioral Development) のシンポジウムで発表することになった。その他、上述の研究に関係して、発達初期におけるラテラルドミナンスの状態を三カ月児を対象として研究した。これらの研究は現在も継続中である。

上記以外に、これまでの自分の研究をSRCDなどの場で発表したり、コロキウムで議論する事ができた。また、Rutgers大学（New Jersey）では乳幼児研究をしている若手研究者と出会うことができ、新しく共同研究もスタートすることになっている。このような自分と同世代の研究者との出会いは、高名な研究者に会うのとは違った喜びであった。十カ月の研究期間はあっという間に過ぎてしまったが、ここでの経験は今後の励みにつながるものと信じている。

帰国後の研究経過について。帰国してあっという間に六カ月が経過してしまっただけで、アメリカでやり始めた仕事の多くはまだ継続中であるが、Purdue大学で行った研

究の内、ラテラリィに関する物の一部は日本心理学会第50回大会で発表された。また、帰国直後から、Purdue大学で行った分析方法を使って乳児の行動分析を行ったが、この結果の一部は本紀要に報告した。また、発達グループとして従来より続けている“きょうだい関係”に関する共同研究にも再び加わらせてもらっている。現在進行中の研究は、今後数年の間に徐々に結果が明らかになって来るものと思われる。

思えば短い一年ではあったが、密度の濃さは今までのどの年よりも濃いものであった。このような機会を充分活用できるよう援助していただいた教室の皆さんに、この場をかりて感謝の意を表します。

研究経過報告

石田 勢津子

この一年の研究を振り返ってみると、まず、梶田助教授を中心とするPLATT（個人レベルの学習・指導論）に関する共同研究がある。この一連の共同研究は3年目になるが、現在、大学院の学習グループの全員が加わる共同研究のテーマとなっている。大学院の院生の人たちにとっては、時間的な負担は増すであろうが、研究のテーマそのものについての学習はもちろんのこと、共同研究をすることによる副次的な学習もできる機会である。個々人の研究テーマの一つとして取り込むこともできるし、2本柱の一つにすることもできるであろう。

さらに、本年度には附属学校の先生方も加わり、本紀要にも掲載されているマイコンを用いたPLT研究が進められている。この附属学校の研究グループには、私の恩師の方々もおられ、時の流れを感じさせられる研

究である。

このPLATTの研究も、一つの節目を迎えつつある。本年出版された梶田正巳著の「授業を支える学習指導論—PLATT」に、この基本的な概念や構想が示されている。その実証的な研究として、現在いくつかの研究が平行して行われているが、できるだけ早い時期に、論文として発表する予定になっている。それと同時に、現在今後の展開についても検討を進めている。

個人の研究については、本年度は実験を行うことができず、もっぱら今までの実験の結果を整理したり、まとめたりといった活動が主であった。昨年実施した実験結果は、本年度中に掲載の予定である。また、自己評価、セルフコントロールに関する研究をまとめたものも、近々発表されることになっている。